

『大和物語』第一四二段についての覚書：伊勢の姉と『伊勢集』『竹取物語』

辛島，正雄
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7325708>

出版情報：語文研究. 134, pp.1-15, 2022-12-09. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



『大和物語』第一四二段についての覚書

— 伊勢の姉と『伊勢集』『竹取物語』 —

辛 島 正 雄

はじめに

『大和物語』第一四二段は、三首の和歌を含む章段であるが、最初の一首が『古今和歌集』所収の著名な歌であるのみならず、内容の特異さとも相俟って、〈虚構〉された〈作り物語〉であるうとされる。『古今和歌集』の歌を利用して話を創作することは、『伊勢物語』第六五段などのように、少なからぬ先例のあることからすれば、類例が『大和物語』中にあったとして、さして奇異な現象ともいえない。筆者は、〈虚構〉された本章段の成り立ちについて、特段の関心があるわけではなく、むしろ出来上がったひとつの物語として、その表現と内容そのものに興味がある。〈歌語り〉の採録ではなく、作ら

れた物語であるからこそ現れた、本章段の特徴について、少しく検討を加えてみたい。

一 「故御息所の御姉」とは誰か？

『大和物語』の本文は、こんにち、二条家本系統の有力な写本に基づいてもつばら読まれているが、ここでは試みに、六条家本系統のなかでも最古の写本である、九州大学附属図書館蔵支子文庫本（以下、「九大本」と略称。『在九州国文資料影印叢書〔第二期〕』一九八一年、在九州国文資料影印叢書刊行会）所収。フルカラー画像を附属図書館ホームページ内「九大コレクション」から閲覧可能である）を用いて、読み解いてみよう。第一四二段の全文は、次のとおりである（句読点や濁点、かぎ括弧、改行は私意による。読

解の便宜のため、若干の傍記を施した。

故みやすどころの御あね、伊勢のかみのむすめ、おほいこにあたりたうびけるなん、いとかぎりなうらうづき給ひ、歌よう給事(みカ)も、このみやすどころにはまさりてなにいまそがりける。わかき時(女 親)、めをやはうせたうびにければ、まゝ母のてにいまそがりければ、心にもものゝかなはぬときもありけり。さて、よみ給ける、

ありはてぬいのちまつまのほどばかり

うき事しげくおもはずもがな

となんよみたうびける。

梅の花を(折)りて、

かゝる身(カ)のあきもうつらずにほひせば

はるこひしてふなげきせましや

とよみたうびたる。

いとをかしうよしづきていまそがりければ、よばふおとこもいとおほかりければ、返事(返カ)もせざりけり。「女てふもの、つひにかくてはてたまふべきものにもあらず。時ぐは返事したまへ」と、を(親)やもまゝ、母もいひければ、せめられて、かくなんいひける。

思へどもかいなかるべみしのおれば

つれなきともや人はみる覧

とばかりいひやりて、ものもいはざりけり。

かくいひやりける心ばへは、おやなど、「をとこあはせん」といひけれど、「いさ(一生)うにおとこせでやみなん」といふ事をなん、よとゝもにいひけるもしるく、はたちあまりこゝのつにてなん、うせたうびにける。

この歌ども、みなふる事になりたる事どもなり。

(10オ―11ウ)

本章段の主人公は、冒頭に紹介される「故御息所の御姉」である。ところが、この人物の素姓が、二条家本系統の本文では、判然としない。「新編日本古典文学全集」本によれば、故御息所の御姉、おほいこにあたりたまひけるなむ、いとらうらうじく、歌よみたまふことも、おとうとたち御息所よりもまさりてなむいますかりける。(三六一頁)

となつてゐる。いま、二条家本系統の写本を底本とする代表的な注釈書として、柿本奨著『大和物語の注釈と研究』(二九八一年、武蔵野書院。以下、『注釈』と略称)、森本茂著『大和物語全釈』(一九九三年、大学堂書店。以下、『全釈』と略称)、今井源衛著『大和物語評釈下巻』(二〇〇〇年、笠間書院。以下、『評釈』と略称)を参照すると、「故御息所の御姉」について、『注釈』では、「誰とも不明。」(三六〇頁)とし、古注の説を紹介するにとどめるが、『全釈』では、六条家本系統の御巫本や鈴鹿本に「いせ

のかみのむすめ」とあることに着目して、「これらによれば、『故御息所』は伊勢守藤原繼蔭女の伊勢ということになる。」(三六九頁)とし、『評釈』でも、「この六条家本系統の異文は、主人公を伊勢御の姉に想定しようとしているのではなからうか。」(一五八頁)と説く。二条家本系統の本文によるかぎり、『注釈』のような判断に留めるのが手堅い注釈態度だと思うのだが、九大本で読むことにした以上、ここは、『全釈』『評釈』の示した理解こそが、素直な読みだということになる。

ところで、『大和物語』中の伊勢の登場は、第一段に「伊勢の御」(二五三頁)、第一四七段に「伊勢の御息所」(三七二頁)と見える二回のみであり(『全釈』では第一八段の「二条の御息所」(二六六頁)、つづく第一九段の「おなじ人」(二六七頁)も伊勢のことであるとし、『評釈』も、消極的ながらそれに従う)、いずれも敬語で遇されることはない。それが、「姉」については、一読して気づくように、「御」「たうぶ」「給ふ」「いまそがり」といった尊敬表現が多用されており、姉妹での扱いに大きな違いのあることは、やはり不審とせざるをえない。そこで、伊勢の姉という理解そのものが荒唐無稽だとして、六条家本系統の本文のありようを否定することもできようが、あるいは、「うせたうび」た実母が、現存『住吉物語』の継子の姫君のように、天皇に連なる高貴の血筋である、というような裏事情を読み取

るべきなのであろうか(母は「古き御門の御むすめ」とされ、姫君が「八つばかりのとし」に亡くなっている。「有精堂校注叢書」本七〇八頁)。姉の父親と継母に対して、敬語は、もちろん使用されない。

ちなみに、九大本の本章段末には詳細な勘物があり、その内容についても、『評釈』において、つぶさに検討が加えられている(一五七―一五八頁)。そこには、「故御息所者宇多天皇女敷追可考」、「御姉第五者宇多院第五女依子内親王是也」(二二ウ)、「御母者小八条御息所」(二二オ)といった情報が記されているものの、いずれもまったく信用できないとする。また、「伊勢のかみのむすめ」に対する項目がないところからすると、もとは「御姉、おほいこ」とある二条家本系統の本文に基づいての考証であつたか、との疑いもある。だとすると、六条家本系統の本文にのみ見える記述は、傍注が本文化するなどした、後世の加筆かとも考えられる。

ともあれ、本文の素姓を疑い始めると、これ以上の深入りや詮索は避けたいところであるが、迷いを振り払い、九大本の本文に即して読み解けば、本章段の主人公は、「伊勢守の娘」のうちの「大い子」(長女で、すでに故人となった著名な歌人「伊勢の御息所」の腹違いの「御姉」である、として読み取るよう、仕向けられていると判断される。ただし、伊勢に姉がいたということは、『尊卑分脈』等に確認できな

い。また、伊勢じしんの生歿年も未詳であるが、貞観十五年（八七二）生まれで、仁和四年（八八八）、十七歳で宇多天皇の後宮に入った藤原基経の女温子に出仕しているので、伊勢も主人と変わらぬ年齢であつたかと見られる。歿年は、『伊勢集』に、天慶元年（九三八）十一月五日に歿した醍醐天皇第四皇女勤子内親王を悼む歌（四四七番）が見えるので、それから数年を経て世を去つたとすれば、五年後のことだとして、享年七十二歳ほどである。よつて、本章段が書かれるとすれば、十世紀半ばごろ以降、ということにならう。

それにしても、ここに据えられた主人公は、どうして「故御息所の御姉」なのであろうか。二条家本系統の本文によるかぎり、その理由は判然としないのだが、ここでは、しばし、馴染みの薄い九大本に導かれるままに、これを「故伊勢の御息所の御姉」と積極的に受け取ること、読みの可能性を探つてみたい。

二 『伊勢集』冒頭が引き寄せるもの

本章段を読んでいると、なぜかふと想起されてくるものが、筆者にはある。二条家本系統に、「故御息所の御姉」の「おとうとたち」とあるうちのひとり「伊勢の御息所」の、〈家の

集〉たる『伊勢集』の冒頭である。

寛平みかどの御時、大宮す所ときこえける御つほねに、大和に親ある人さぶらひけり。親いとかなくして、「なべての男はあはせじ」とおもひてさぶらはいひわたり給ふを、いかゞありけむ、「親、いかゞいはむ」とおもへど、「さるべき宿世にこそあらめ、わかき人たのみがたくぞあるや」とぞいひける。年経るほどに、その時の大将の婿になりけり。親き、て、「さればよ」とおもひけり。女かぎりなく恥づかしとおもふほどに、この男のもとより、女の親の家は五条わたりなるに、来て、垣の紅葉に、かく書きつけたり

人住まずあれたるやどを来てみれば今ぞ木の葉は錦おりける

女いと心うき物から、あはれにおほえければ

涙さへ時雨にそひてふるさともみぢの色も濃さぞまされる

とかきて、ねずみもちにつけてやりける。九月ながばかりのことなるべし。男も見て、かぎりなくめでけり。

〔新日本古典文学大系〕本三十四頁「二二番」

「寛平の帝の御時」「いづれの御時にかありけむ」の異文があることは有名、「大御息所」＝皇后温子のもとに出仕した「女」＝伊勢は、「親いとかなくして」、「なべての男はあはせじ」と考へるような、鍾愛の娘であつた。ところが、宮仕えをつづけるうちに、「御息所の御せうと」＝藤原仲平による「ねむごろ」な求愛を受け、「いかがありけむ」という関係になる。男とこうなつたことに、親の思惑を氣にする女であつたが、親は、「さるべき宿世にこそあらめ」と、今回の事態を容認するいっぽう、「若き人頼みがたくぞあるや」との不安も、口にせざるをえなかつた。数年が経過し、はたして男は、「その時の大将の婿にな」つた。親としては、「さればよ」と、不安が的中したかたちであり、女も、「かぎりなく恥づかし」と思うが、今さらどうにもならない――。

話のポイントは、「女」＝伊勢が、親にとって特別な存在であり、「なべての男はあはせじ」と考えていたのに、貴公子からの熱心な求愛に應えてしまつた結果、当初の親の心づもりも変更を余儀なくされ、加えて、「若き人頼みがたくぞあるや」との不安までの中し、女はつらい状況に陥つた、とするところにある。

一般論として、当時の女たちを、親たちがどのように扱おうとしたか、を考えると、大前提として、娘にとっての幸

せな結婚を願う、ということとは、しごく当然のことであろう。ことに鍾愛の娘ともなれば、相手の男に誰を選ぶかは、親にとつても大問題である。『伊勢集』冒頭では、親の目が十分に届かないところで、女が不用意にも男の好意を受け入れたがために、案の定、権門出身の若い男の、裏切りを招くことになつたのである。

こうした女と親、そして男との関係性について、もつとも赤裸々に関係者それぞれの思惑の食い違いを暴露したのが、ほかでもない、『竹取物語』「妻どひ」の段であつた。

まず、男たちは、評判となつた魅力的な女には、あの手この手でアプローチをかけることに、労を惜しまない。その競争に勝つて、女を手に入れることに、全力を注ぐのである。かぐや姫のみならず、『うつほ物語』のあて宮、『源氏物語』の玉鬘と、同様の系譜を辿ることができる。そのような行動の根底には、「つひに男あはせざらむやは」(『竹取物語』新編日本古典文学全集「本二頁」)との確信が存在する。そして、親もまた、娘の幸せな結婚を願う。ただし、娘の幸せは、娘ひとりの問題ではなかつた。竹取の翁はいふ――、

「この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふことをす。その後なむ門^{かど}広くもなりはべる。いかでかさることなくてはおはせむ」(二二頁)

娘の結婚は、家門の繁栄へと、ストレートに繋がるものなのである。翁は、「この人々の年月を経て、かうのまいましつつのたまふ」熱心な求婚に、「思ひさだめて、一人一人にあひたてまつりたまひね」(同)と、それを受け入れるよう、かぐや姫に迫る。対するかぐや姫の返答は、

「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、後くやしきこともあるべきを、と思ふばかりなり。

世のかしき人なりとも、深き心ざしを知らでは、あひがたしとなむ思ふ」(同)

というものである。一見すると、「あふこと」を拒んでいるようでもあるが、いいかたを変えれば、「深き心ざし」さえ確認できれば、「あふこと」は可能だ、ということになる。だからこそ、翁も、「思ひのごとくものたまふかな」(同)と応じるのである。この点、「女」≡伊勢の場合は、「深き心」であることを信じたものの、じつさいには「あだ心」をもたれて、「くやしき」思いをしたのである。いわば、親の願いや、女の思いのままにはならない、相手の男の「心」ひとつで「あふこと」の現実が一変する、ひとつの失敗例として、『伊勢集』の冒頭は理解できる。

三 『竹取物語』の「こだわり」と『伊勢集』

さて、『竹取物語』において、女が男と「あふこと」を受け入れる条件として、男の「心ざし」が深く、なおかつ不変であることにこだわっていることは、右に見たとおりである。

この『竹取物語』のこだわりは、一般論としても理解しやすいものであると思うのだが、このような考えに共感し、そのこだわりを継承しようとしたものとなると、存外、見つけるのがむずかしい。そのようななか、稀有な例として見出すことのできたのが、別途考察を加えた、『大和物語』第一四七段で語られる生田川伝説なのであった(拙稿『大和物語』第一四七段、物語絵歌の詠者についての覚書『国語国文 薩摩路』67号、二〇二三年三月)を参照。そこでは、男と「あふこと」については前向きでありながら、時を同じくして求婚してきたふたりの男が、「心ざし」を含めて優劣をつけがたいために思い悩み、どちらかひとりを選ぶうとしたものの、それにも失敗した女が、進退窮まるかたちで入水する、という悲劇へと展開する。そして、そのような伝説を叙述するさいに持ち込んだと思われるのが、『竹取物語』「妻どひ」の段に見える、特徴的な表現の数々だったのである。ただし、かぐや姫の場合、あくまで「あ

ふこと」から逃れる方便としての「心ざし」へのこだわりであったものが、ここでは、もつと現実的に、「あふこと」のために「心ざし」を確かめようとしての、痛ましい挫折であった。

こうした、物語の世界から窺える、男と女が「あふ」ために必要とされる諸条件について、『伊勢集』冒頭では、いかように対処しようとしたか、あらためて確認してみよう。まずはなにより、親も女も、「あふこと」に後ろ向きではなかった。「なべての男はあはせじ」というのも、親としては鍾愛の娘を、特別な男に「あはす」ことを願っていたのである。二類本『伊勢集』では、「おやいとかなしうして、男などもあはせざりけるを」(私家集大成「本二三一頁」とあり、いつそう箱入り娘の扱いである。だが、「いとねむごろに言ひわたり給」うた男に対して、女は「心ざし」があるからだと信じて、その求愛に応じた。このあたり、二類本では、「宮す所の御せうと、年比いひわたり給ひけれど、しばしはさらにきかざりけるを、いかゞありけむ、思つきにけり。」(同)とあり、男女のかけひきの様子が、より具体的に表現されている。しかし、娘の身に起こったことを知り、親はふたりの関係を危惧した。できてしまった男女の仲を「さるべき宿世」とするのは、いわば当時の常識であるが、「若き人」は「頼みがた」という

のは、当事者である若い女としては想像したくない、年長者ならではの経験値からくる破局の予感なのであろう。かぐや姫は、男女間にはこうした事態が起こりがちであることから、「後くやしきこと」のないようにしたい、といっていたのだが、この女は、「あふこと」を徹底拒否したいわけではなかった。男の「心ざし」を信じ、受け入れた。相手は、じしんの仕える主人の異母弟であるから、もちろん、「なべての男」というわけではない。その「心ざし」さえ変わらなければ、親の心配も、杞憂に終わっていただろう。だが、現実には厳しかった。男は有力者(二類本では「時のおほいまうち君」[同]とする)の婿となり、親も女も、思いどおりにならない事なりゆきを、しよせん家格の釣り合わぬ仲だからとして、甘受するほかなかった。――『伊勢集』は、そんな女の傷心を、結婚しても女を忘れられずに手紙をよこした男とのやりとりを契機に描くところから、スタートする。どれだけ親が特別な期待を娘にかけても、また、娘もその期待に応えるべく身を処しても、思わぬなりゆきから期待は潰れてゆく現実、――ここからは、相対する男次第で、その内実が一変してしまう「あふこと」のむずかしさ、頼りなさ、食い違いを、読み取ることができよう。

以下、女は、何人もの男から思いを寄せられることになる

が、初恋の蹉跎を引きずりつつも、安易に靡くことなく、誇り高く身をもてなして、皇后温子への宮仕えを優先させた、とする。

四 伊勢の姉の物語の内実と伊勢の物語との共鳴

『伊勢集』冒頭の「女」は伊勢の人物像を、右のように理解するとき、『大和物語』第一四二段、伊勢の姉についての物語は、どのように見えてくるであろうか。

伊勢は、「親いとかなくして、「なべての男はあはせじ」と思ひてさぶらはせ」た鍾愛の娘であったが、その姉は、「若き時、女親は亡せたうびにければ、継母の手にいまそがりければ、心にもものかなはぬ時もありけり」とされるように、そもそも、母の不在という失意のなかに、継子としての不如意までも抱え込んでいた。そのいっぽうで、「歌詠み給ふ事も、この御息所にはまさりてなんいまそがりける」と、和歌の名手である伊勢にもまさる歌才であったとする。この設定ひとつをとっても、すでに〈作り物〉の気配が漂う。「いとかぎりなうらうづき給ひ」とあるのは、「らうづく」の語が見慣れないが、「愛敬+づく」の類であれば、「労+づく」で、洗練されたところが備わっている、ほどの意であろうか。二条

家本系統の本文には、前掲のように、「いとらうらうじく」とのみある。

ちなみに、「心にもものかなはぬ」云々とあるのは、『十訓抄』第九「懇望を停むべき事」に、「心にもものかなはぬ」と、世の習ひぞかしと思ひなして」（『新編日本古典文学全集』本三七八頁）と見えるように、ごくふつうの散文表現であるが、しらべがどこか和歌的でもあるので、似たようないいまわしを探せば、『古今和歌集』巻八に載り、『大和物語』第一四五段にも出る白女（しろめ）（第一四五段では「うかれめに、しろといふ者」〔三六五頁〕とある）の歌、

いのちだに心にかなふ物ならばなにか別のかなしからまし（離別・三八七番。以下、勅撰和歌集の引用は『新編国歌大観』による）

あたりが想起されようか。離別を死別に転ずれば、歌の内容は、母に先立たれた姉の思いそのままである。『源氏物語』「夕霧」巻には、母の死に悲嘆する落葉の宮の様子を叙して、「干る間もなく思し嘆き、命さへ心にかなはずと、厭はしういみじう思す。」（『新編日本古典文学全集』本④四四四頁）と表現する例がある。また、はるか後世の歌であるが、『新編古今和歌集』巻十八に見える、

とにかく心に物のかなはぬもありはつまじき世にぞな

は、「貞和百首歌に」と詞書された中宮大夫公宗母の詠であるが、圈点部からは、「心にも、の、かなはぬ時もありけり。さて、よみ給ひける、ありはてぬ、命待つ間のほどばかり……」とある、本章段の一連の表現に拠つたらしいことが窺える。

その姉は、「いとをかしうよしづきていまそがりければ、よばふ男もいと多かり」ということで、男たちの「よばふ」＝求婚の対象となる。当然、男たちは、それぞれに、わが「心ざし」のほどを訴える歌をよこしてきたのだが、姉は、「返り事もせざりけり」と、相手にしない。そのような態度に、父親と継母は、「女てふ者、つひにかくて果てたまふべきものにもあらず。時々は返り事したまへ」と、世間の常識を説いて聞かせる。前半の物言いは、さきの竹取の翁の、「この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふことをす」、「いかでかさることなくてはおはせむ」との発言を想起させる。女は、男と「あふこと」を、しないわけにはゆかないのだ。「あふこと」は、人の世の定めなのである。それゆえ、「心ざし」を見せてくる男たちには、失礼にならぬよう、「返り事」をせねばならない。大勢の男たちのなかには、親たちの眼鏡にかなう者もいるであろう。親たちは、今後の「あふこと」に備えて、「返り事」をするようにと、姉に強く促す。困った姉

は、「返り事も」しなかった理由を明かすべく、一度だけの返歌をした。

思へどもかひなかるべみしのぶればつれなきともや人は見るらん

『注釈』は、「一首は、責められて、心にも無いことを言ったが、わが身の将来に絶望している意をこめる第二句だけは本心。」（三六一頁）と説く。

親たちが、「男あはせん」と姉にいうのは、伊勢に対して、「なべての男はあはせじ」としていたのとは、ずいぶん扱いが違ふようにも見えるが、男に「あはす」ことを考えているという点において、両者に変わりはないのである。伊勢は、「なべての男」ではない男から「ぬむごろに」言い寄られ、それに応えたのだが、姉は、「心にも、の、かなはぬ時もあり」、「憂き事しげく思」う日常であつたので、それ以上の「憂き目」にはあいたくなかつた。亡き母を恋しく思い、人生に期待や希望を抱くことを諦めた姉は、男と「あふこと」のきっかけさえ、けつして作ろうとしない。似た境遇にあつた落窪の君は、心のうちには、とありともかかりとも、よき事はあるなむや、女親のおはせぬに、さいはひなき身と知りて、いかで死なむと思ふ心深し。尼になりても、殿のうちはなるまじければ、ただ消え失せなむわざもがな、とおもほ

す。〔落窪物語〕巻一「校注古典叢書」本一五―一六頁）

とその心情が描かれ、ひとりごとに、

日にそへてうさのみまさる世の中に心づくしの身をいかにせむ（二二頁）

世の中にいかであらじとおもへどもかなはぬものはうき身なりけり（二三頁）

と詠んでいるのも、姉の姿とびつたり重なり合うが、現実には、巷で読まれている継子物語よろしく、窮地の継子を救い出し幸せにする男など、どこに存在するというのか。だとすれば、生きかたはおのずと決まってくる。「一生に男せでやみなん」＝「あふこと」を断乎拒否することを、姉は人生の柱に据えた。これは、親たちの考えに真つ向から背くものであるが、そのような生きかたを貫くべくじしんを律し、はたして二十九歳にして、願いどおり、独身のまま死んだ、とする。さきに、筆者は、「相手の男の「心」ひとつで「あふこと」の現実が一変する、ひとつの失敗例」として、『伊勢集』の冒頭は理解できる。」と述べたわけだが、そのような「あふこと」の現実への不信任から、親たちがどれほど「あふこと」を勧めようとも、しよせん拙い身の上であるという深い自覚のもと、「あふこと」の失敗、不幸から身を守ろうとしたのが、この「故御息所の御姉」の物語だったのではあるまいか。『古今和

歌集』巻十八の平貞文の歌（雑下・九六五番）を借りて、姉は、

あり果てぬ命待つ間のほどばかり憂き事しげく思はずも
がな

と願ったのだが、それを実現する唯一の方法というのが、女にとつて取り返しのつかない「憂き事」をもたらす男との「あふこと」を拒否し、「一生に男せでやみなん」という生きかたであり、その覚悟を生涯にわたって貫き、短い人生を完結させたのである。

こうして、有名な妹と無名の姉と、ふたつのエピソードを突き合わせて読むとき、不思議なことに、あたかもひとつのセツトであるかのように見えてくる。著名な歌人である妹の恋模様は、『伊勢集』等により知られるところであるが、その伊勢に、じつは腹違いの姉がいた、とするところに、なにより『大和物語』第一四二段における作意の、核心がある。二条家本系統の本文からでも、そのように理解することは、不可能ではない。親たちは、伊勢の将来に期待をかけ、特別に大切にしていたが、はやくに母を亡くした腹違いの姉についても、結婚させることを考えていた。皇后温子のもとに出仕した伊勢は、主人の異母弟である若い仲平から思いを寄せられ、親密な関係となったが、姉も美しく、歌詠みでもあったので、多くの男たちから求婚された。伊勢は、ふたりの今後

を心配した親たちの不安が的中し、仲平が有力者の婿となったことで破局を迎え、傷心を余儀なくされたが、姉のほうは、親たちの意向に背くことはわかっていても結婚は望まず、生涯独身のまま、若くして亡くなった。——いわば、対照的な生きかたをした異母姉妹の物語が、ここからは浮かび上がってくるのである。それは、男と「あふこと」が、女の人生を否応なく翻弄し、運命を決定づけてしまう現実を前に、それぞれが「あふこと」とどう向き合ったかの、ふたつのモデル・ケースなのである。継子である姉は、母をはやくに失ったため、の不如意をかこつ日常であったが、そんな姉とは違って、腹違いの妹は、親たちの大きな期待を背に、華やかな宮仕えの場に出た。貴顕が集う宮中に身を置く妹は、ほどなくして貴公子から求愛され、その好意を受け入れた。しかし、ふたりの関係は長つづきせず、恋に破れた妹は、傷心をかかえ里に戻った。そんな妹の傷ついた姿を見た姉は、同じ轍を踏むまいと、固く心に誓うばかりであった。——ここまで読み取ることが許されるならば、合わせ技一本とでもいおうか、これはもはや、かの『源氏物語』第三部、宇治の姉妹が辿るそれぞれの運命を、はやばやと先取りした感さえある。ただし、贅言には及ぶまいが、姉を「大い子」とするのは、宇治の姉君を、後世「大い君」と呼びならわす（例えば、『風葉和歌集』成

立の前後の撰かとされる『源氏物語歌合』〔樋口芳麻呂校注「王朝物語秀歌選」下〕（一九八九年、岩波書店）所収〕に、作者名を「総角の大君」〔三七六頁〕とする。こととは、もちろん、なんの関係もない。

五 第一四二段の真面目——伊勢と『竹取物語』と

『評釈』では、本章段の特異性について、次のように述べている。

才^{ママ}婉の女性がまま母に育てられて大きくなり、独身の決意を抱くようになって、そのまま二九歳の生涯を終った話であり、主題の特異な性格がまず注目される。貴族の女性に主体的な生き方がほとんど許されていなかった当代に於いて、自ら独身を貫こうという異常な決意を示す女性稀であり、又それを実現するというのはさらに異常であろう。他の物語文学等に徴しても、『源氏物語』宇治十帖の大君、あるいは源氏を拒んだ朝顔の姫君にその面影がいささか映っているが、それは、『大和物語』から五十年後のことである。また当時皇女たちは独身であることが原則と見られていたようであるが、ここでは身分も違う。こういうことがはたして当時の事実としてあり得ることかと、一読して素朴な疑問が起る。（二六〇頁）

すなわち、のちに現れる結婚拒否をする女性像の、いわばしり、という理解である。杉山康彦「読む」一生に男せでやみなむ——大和物語 百四十二段——」（『日本文学』36巻1号、一九八七年一月）でも、「ここには結婚拒否という自らの生きざまを自ら選んだ女主人公がひとつの理想として造型されているという事ではないのか。」（三三頁）と説く。『源氏物語』中ならば、指摘のあるふたり以外にも、「紅梅」巻に登場する、真木柱の娘「宮の御方」（⑤四〇頁）の生きかたも、思い合わされよう。実父である螢兵部卿宮はすでになく、母の再婚相手である紅梅大納言邸に、継子として暮らしているのだが、

もの思し知るほどにねびまさりたまへれば、何ごとも見知り、聞きとどめたまはぬにはあらねど、人に見え、世づきたらむありさまは、さらにと思し離れたり。（⑤五四頁）

として、世間並みに結婚することなど、まったく考えていないのである（なお、本章の女と宮の御方の人物像が似ていることについては、篠原昭二「結婚拒否の物語序説——朝顔の姫君をめぐつて——」『同氏著『源氏物語の論理』（一九九二年、東京大学出版会）所収」を参照）。そんな宮の御方に、匂宮が執心していることは語られるものの、それ以上の進展もないまま短い巻は終わるので、物語の本筋に合流することもない単発的なエピソードではあるのだが……。

『評釈』はさらに、本章段は「虚構に基くものである」（同）として、先行研究を敷衍したうえで、次のように説く。

作者は、周知の古歌三首を材料に用いながら、その中の一首を、多分『古今集』の平中の歌と知っていながらも、たまたま『伊勢集』の中に伊勢との贈答歌らしい形で発見したことにヒントを得て、有名な伊勢の姉なる人物を作り出して、その述懐の歌にすりかえ、話全体としては、この美しい女性が継母に育てられて、結婚もしないで一生を終ったという裏話に仕立て上げたのである。随分手のこんだやり方であるが、しかし出来上がった話そのものは、そうした作為の跡をかなりうまく隠しているともいえる。（二六三頁）

『大和物語』の形成に『伊勢集』が関与しているらしいことは、第一一九段や第一三八段からも窺えるようだが、素材を提供するといったこと以上の深い繋がりがあることを、本稿では考えてみたかったのである。具体的には、女が男と「あふこと」をめぐつての強いこだわりが両者に共通する、ということであり、そのようなこだわりの淵源が現存『竹取物語』であろうことも、容易に想像がつく。そして、そうした『竹取物語』のよき理解者として両者を繋ぐ架け橋となるのが、ほかならぬ歌人伊勢の存在なのである。

さきにふれた『大和物語』第一四七段で語られる生田川伝説については、前掲拙稿において、「語り直された（いまひとつの）「なよ竹のかぐや姫」の物語」とでも呼べる内容へと変貌したものであった。」と説いておいたが、その伝説についての物語絵を前に、人々が画中人物になつて歌を詠むさい、そうした「変貌」に唯一敏感に反応したのが、五人の詠者の筆頭として、まずは「男の心にて」（三七二頁）詠み、再度「生きたりしをりの女になりて」詠んだ「伊勢の御息所」の、後者の詠歌、

あふことのかたみに恋^{（懐く）}ふるなよ竹^{（こゝろ）}のたちわづらふと聞く
ぞ悲しき（三七二頁）

であることも、詳しく述べておいたとおりである。

そんな伊勢の〈家の集〉である『伊勢集』は、冒頭からの三〇首あまりの部分が、古来「伊勢日記」とも呼ばれ、きわめて歌物語的な筆致をもっていることが特徴的であるとして、従来から種々に論じられてきたのであるが、本稿では、その冒頭の詞書に、『竹取物語』にも通じるこだわりを見出し、「親の願いや、女の思いのままにはならない、相手の男の「心」ひとつで「あふこと」の現実が一変する、ひとつの失敗例として、『伊勢集』の冒頭は理解できる。」と意義づけたのであった。そして、『大和物語』第一四二段では、そのような『伊勢

集』冒頭での、『竹取物語』との繋がりを思わせる、親たちが娘を男に「あはす」ことについてのこだわりと、女じしんが男と「あふこと」についてのこだわりとに触発されるかのよう、に、親たちが男と「あはせ」ようとしても、「あふこと」は女の不幸にしかならないと見て取り、「一生に男せでやみなん」Ⅱ「あふこと」を断乎拒否する、それこそ「かぐや姫の再誕」ともいふべき女の姿を描き出すのに、その女を、著名な歌人である伊勢に、知られざる異母姉がいたと仮託して、継子物語の枠をも借りつつ、物語化したのである。さきに、「有名な妹と無名の姉と、ふたつのエピソードを突き合わせて読むとき、不思議なことに、あたかもひとつのセットであるかのように見えてくる。」と述べたのだが、その原因は、こうしたふたつの物語の、相互補完的な関係性に由来するであろう。よつて、章段末の、「この歌ども、みな古事になりたる事どもなり。」との一文は、古い歌語りの採録の態を装いながらも、かえつてこれが、虚構された新作物語であることを、逆説的に証し立てるものとなっている。たしかに歌は借り物であらう（ただし、さきの『評釈』に、「周知の古歌三首を材料に用いながら」というのは、一首目こそ『古今和歌集』に出る平貞文の著名な歌を借りていること明白ながら、つづく二首目、三首目については、ほかに所在も確認できず、古歌である保証はない。それこそ、本章段の作者によつ

て創作された可能性もある）が、そこに盛られた内容は、『竹取物語』への深い共感に裏打ちされ、鮮烈な印象を残すものとして、『大和物語』中のみならず、物語史を展望しても、特異な位置を占めているように思われる。まさしく、「この世の濁りにも穢れず」（『綜合』巻②三八〇頁）、気高くおのが生涯を全うした女の物語であるがゆえに、「かぐや姫」を思わせるその生きかたへの絶対的な傾倒を表明すべく、例外的に手厚い敬意をもって待遇した、とでも考えれば、腹違いの姉と妹との扱いに大きな違いが出たのも、理由のあることであつたのかもしれない。

さて、『評釈』とは異なり、本章段を〈虚構〉と見ることに慎重姿勢をとる『注釈』では、『大和物語』全体での章段の連接を意識しながら、

本段は結婚に絶望した薄幸の女性の話である。前段を結婚生活に破れた女性の話として捉え、「薄幸の女性」という共通性で前段に続くのであろう。それは自身の性格から招いた事であり、これは幼時以来の灰色生活のゆえに暗い性格に育つたためである。業とか性とか運命とかいうものにどうしようもなく縛られている点は両者似かよう。（傍線筆者。三六三頁）

と評している。たしかに、物語の印象としては、直前の第一

四一段ともども、かなりユニークな内容がつづく、とはいえよう（第一四一段と第二四二段との対照性については、小野芳子「第百四十二段注釈」「大和物語研究」5号、二〇一七年三月）に詳しい。なお、同論文では、これまでの諸注釈書が本章段について、「美貌の聡明な主人公が、境遇に恵まれないまま若死にした、薄幸の人生の物語と読み取っている」ことに異を唱え、「薄幸の人物像のはずだと刷り込まれた読者の同情や共感を覆す諸語味を狙ったもの」であると説く（「六九頁」のだが、賛同できない。本稿では、従前の理解を踏襲している）。

『大和物語』第一四一段では、ひとりの男が、「もとの妻」と筑紫から新たに迎えた「今の妻」と三人で同居する（三五八頁）、第一五八段とも似た二人妻型の話と見せかけながら、意外にも妻どうしが仲よくなる。これは、本章段が、継子物語でありながら、肝腎の男の出現を否定するという、意表を衝く内容であるのとも、一脈通ずる筆法である。三人同居の生活は、男が留守がちであるために、「今の妻」のほうが「しのびて男」する（同）事態となるが、それを知っても「もとの妻」は、変わらず親しい関係を保つ。しかし、それを許せない男は冷淡になり、けつきよく「今の妻」は、故郷である筑紫に帰ってゆく、という顛末である。ここでは、男とふたりの女との関係性よりも、氣立てのよい「もとの妻」に「今の妻」が妹のように懷いて慕っているところ、——とりわけ、

別れを前に、「このうはなりこなみ、ひと日ひと夜、よろづのことをいひ語らひて、つとめて舟に乗りぬ。」(三六〇頁)と描くシーンなどに、独特の人間観察があり、興味が尽きない。

『伊勢物語』第二三段などによって、誰しもが承知している二人妻の物語——「本妻と後妻との葛藤や嫉妬に物語の種を見出すべきはすのところ」(『評釈』一五三頁)に、清新な面白さを吹きこんでいる、と評してさしつかえあるまい。

また、引用文の傍線部に關しては、いわば、身から出た錆で不幸せになった、という認識であるのだが、本稿で見てきたような、「一生に男せでやみなん」という女の覚悟の背後にあるものに思いを致すとき、その健気で純粹な思いが、いかに痛切なものであるかを知って、読者は胸を打たれるわけであるが、そうした点への想像力が、残念ながらここには欠けているようである。さらに、『注釈』では、姉が二十九歳で死んだことについて、「明確に年齢を記す。大い子は紛れも無く実在の人物であったのだろう。」(三六一頁)と説くのだが、いっぽうで、「御息所の姉とか、二十九で世を去ったとか、事実の裏づけがあるような口吻をもらすが、記し方は「昔物語」である。」(三六三頁)ともいう。ならば、素直に〈虚構〉であることを認めるほうが、読解にいらぬ混乱をきたさないためにも、合理的なのではあるまいか。

おわりに

如上のように、きわめて特異な内容をもつ本章段の成立には、その背景に、伊勢その人と、伊勢の人生の始発を描いた『伊勢集』冒頭への強い関心があることはもちろんとして、その伊勢が『竹取物語』のよき理解者であることをも承知する誰かの存在が、不可欠であろう。『全釈』では、「大和物語の原作者は伊勢、補筆者(増補者)はその娘の中務か」と見て、「本段は伊勢とみられる人を「故御息所」と書いているから、伊勢の筆とは考えがたく、その娘の中務の筆とみる方が自然であろう。」(三七二頁)と説く。はたしてそこまでいえるか、筆者にはなんとも判断がつかないが、ともあれ、伊勢、さらには中務のかかわる文事のなかに、『竹取物語』との関連性がほかにも見出せるかどうかは、探ってみる価値があるのではなからうか。(二〇二二年八月稿)

(からし まさお・九州大学名誉教授)